

大和公民館だより

発行者 大和公民館

〒409-1203 甲州市大和町初鹿野 1693-1
館長(有賀) ■■■■■ 主事(三枝) ■■■■■

あけまして おめでとうございります

本年もよろしくお願ひいたします 大和公民館

◆ 門松づくりを行いました

去る12月19日に恒例の門松づくりが行われました。参加者は14人と盛況で、講師の平山裕美さんの指導を受けながら、新年への希望と願いを込めて丁寧に門松を作り上げました。

篠子峠の西の麓の伝説・民話

「御雁木の坂とテンツルテン」(ごがんぎのさかとてんつるてん)

駒飼宿のはずれに古道の坂がある。南側は高い石垣と竹藪、北側は用水路を隔てて高い土手で竹藪と杉木立て、川音と風に竹の葉擦れがして昼間でもうす淋しいところである。この竹藪に古いムジナが住んでいて、夜な夜な大入道に化けて旅人や村人を脅し、食べ物を取り人々を悩ましていた。村人は「なんとかならねえか」と思案投げ首だった。そんな中、村でも一番といわれる剛の者、百姓の太郎兵衛さんが「たかがムジナだ。俺が退治してやる。」と意気卷いて、ムジナの好物を持って夜の更けるのを待って出かけて行った。

提灯の灯を頼りに、竹の花の方から古道橋を渡り坂にさしかかると、提灯の先で黒い小さなものがチョロチョロする。太郎兵衛さんは「案の定出たな」と思い、ゆっくりと坂を上って行った。そのうちに小さい黒いものが小坊主となって先を行く。「今に見ろ、化けの皮を剥いでやる。」と太郎兵衛さんは決心した。坂の上の大きな松の木のあたりに来たとき、

小坊主は俄かに大入道となつた。目はギョロリと光り、大きな口をあけ、てんつるてんの（ツンツルテンと同意語）浴衣の裾から毛もじやくらの脛を出し、今にも襲いかからんばかりの形相だ。太郎兵衛さんは臆せず組み伏せようとしたが、どうしたことかその瞬間身体がすうっと軽くなり気が遠くなってしまった。

村人は、太郎兵衛さんの帰りを今か今かと待っていたが、なかなか帰ってこないので大勢で様子を見に行った。あちらこちらと探したが影も形もない。仕方がないので夜の明けるのを待つことにした。朝になって再び探しに行ったがやっぱり姿が見えない。ところがひょっとあの大きな松の木を見上げると、びっくり仰天。太郎兵衛さんは、枝に衿を引っ掛け気を失ってぶら下がっていた。村中大騒ぎとなり梯子や筵、布団などを持ってきて、ようやく助け下した。

このことがあってから、村人は寄合をしてムジナを退治することに決まった。てんでに鎌や鋤、竹槍、棒切れを手に手に集まつた。そこへ旅の坊さんが通り掛かり物々しい様子に何かあるのかと尋ねた。村人はこれこれしかじかとムジナの件を話した。坊さんは命あるものを殺しては可哀想だ。愚僧がムジナが化けて出ないようしてやろうと、お経を唱え祈った。その晩から、ムジナは何処へ行ったのか姿を見せなくなった。

この古道の坂は冬になると凍つて、一面鏡のようになり村人も旅人も大変難儀をした。そこで旅の僧は、村人に山から丸太を伐り出させ、道幅の長さに切り、適當な間隔に敷き段々を作り歩きやすくした。村人は、旅の僧の徳を称えてこの坂を御雁木坂（ごがんぎさか）と名付けた。いつの間にか「ごは（が）んぎよの坂」と呼ぶようになった。